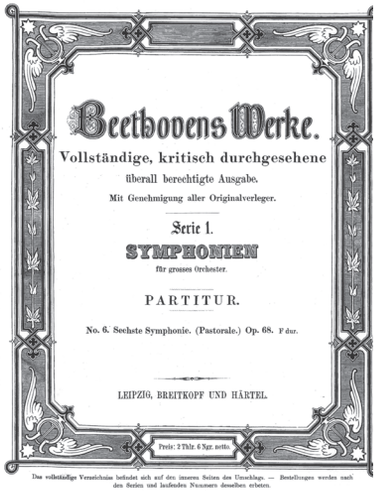


ベートーヴェン交響曲第6番〈田園〉の楽譜の表紙

「交響曲第6番」は人生の岐路？

矢澤孝樹

19世紀ドイツ・ロマン派の芸術観にいまだ強く影響されている現代のクラシック音楽ファンである私たちには、交響曲に対し、「オーケストラによる絶対音楽の究極の姿」という暗黙の了解がある。その一作一作に固有の価値を認め、愛聴するための目印である「番号」は、いつしか神話的な輝きを帯び、作曲家の名前と共に番号を超えた意味を付加される。ブラームスの「第1」が、ブルックナーの「第8」が、などと呟(つぶや)いた途端に、番号の向こうに拡がる壮大な音世界や作曲時のエピソードが無数に立ち上がってくる。

ならばこそ、ハイドンとマーラーの「第6」を組み合わせたコルネリウス・マイスターが指揮する7月の定期演奏会プログラムにちなみ、本誌の編集部から「古今の“交響曲第6番”についての話題を書くように」という執筆依頼をいただくことになるのだろう。面白い。「6番」という番号の共通性から、何が見えてくるだろうか。

ベートーヴェンの「9番のジンクス」

とはいえ、ナンバリングが神話化されるのは、あくまでベートーヴェンの9曲の交響曲以降だと前置きしておかねばなるまい。一曲一曲の交響曲を問題意識に満ちた巨大なモニュメントにしてしまったのは、このフランス革命期の申し子の、独立した市民芸術家として芸術の自律性を信じきる強大な自意識の賜物であり、それが一生のうちに作曲家が取り組める交響曲の数の基準に「9」という縛りを与えてしまった感がある。いわゆる、大交響曲作家が9番までの交響曲しか完成できないという「9番のジンクス」である。

逆に遡(さかのぼ)るなら、それ以前の作曲家にとっては、交響曲は発注主の要請に応じて書く作品に過ぎず（質の優劣を言っているのではなく、意識の問題だ）、一生のうちに数十曲という単位で交響曲が産出される。だから、これらの交響曲において（往々にして後世の人間がつけた）ナンバリングはほとんど整理用の便宜的なものにすぎない。

それでも、「104」のハイドン、「41」のモーツァルトなど、実際に残した交響曲がたとえそれ以上だとしても、ひとまず作曲順という基準で並べられている場合、「第6」という交響曲は少なくとも「きわめて初期の作品」という意味は持つ。

ハイドン、モーツァルト作品は単なる整理番号

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン（1732～1809）の場合、しかしながら初期交響曲の作曲年代はきわめて不確実であり、ホーボーケン番号（音楽学者ホーボーケンによるハイドン作品番号。ジャンル別にナンバリング、Hob.と記す）のナンバリング自体は、後期を別にすればあまり参考にならない。とはいえ、「第6」に関しては幸いほぼ明確である。1761年、ハイドンがエステルハージ侯の宮廷副楽長に就任した時、おそらく侯爵から「“朝・昼・晩”を主題にした作品を」というリクエストを受けて作曲した、交響曲三部作の第1作（すなわち“朝”）ということになる。日の出を思わせる冒頭部はすでに「標題交響曲」の雰囲気だし、宮廷楽団の奏者たちを活躍させるべく各楽器に存分にソロが与えられ、さながら協奏交響曲の趣がある。つまり「ハイドン若き日の実験作」と呼びたくなるのだが、さにあらず。なぜならハイドンの交響曲は104曲すべてが「実験作」にして傑作であり、ひとつとして同じ趣向のものはないからだ！

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）の「第6」（K.43）も、モーツァルト旧全集編纂(へんさん)の際の番

11歳のモーツァルト

号で今や整理以上の意味はあまりないが、1767年ウィーン訪問の際に書かれたもの。作曲途中で天然痘になって死にかけたという曰くつき（？）の作品。11歳とは思えない、当時の交響曲のマナーを完璧にクリアした水準の作品だが、第1楽章が自作のオペラ〈アポロとヒアチントゥス〉のアリアからの転用。そのアリアが“我が息子は逝ってしまった”というのだから、何というブラック・ジョーク。

新たな形式を取り入れた〈田園〉交響曲

さて、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770〜1827）の「第6」といえば、おなじみ〈田園〉である。9曲の交響曲の中で、この曲はどんな位置づけになるだろうか。前5作が、ベートーヴェン流のソナタ形式による交響曲創作のまっすぐな進化の過程を示すとすれば、頂点たる「第5」と並行して書かれた「第6」は、その軌跡から逸脱していこうという意図が見てとれるだろう。つまり、標題性の導入、5楽章構成といった点である。もちろん、動機労作（基本となる音楽素材――たとえば有名な“運命の動機”――を存分に活用し組み合わせ、楽曲を大きな建築物のように仕上げていく作曲法）の徹底という点では「第5」と共通しているが……。この後のベートーヴェンの3曲の交響曲は、リズムの追求（第7）、古典的構成のパロディ（第8）、合唱の導入（第9）とそれぞれ方向性がみごとに異なる。

〈田園〉を作曲するベートーヴェン

作曲家の転換点としての「第6」

すると、仮説が生まれる。その後の作曲家にとっても、「第6」とはひとつの転換点ではないか？　5曲の交響曲を書いたところで、新たな展開を探るか、ひと息つくか。未完の作品が多くナンバリングに問題があるフランツ・シューベルト（1797〜1828、ちなみに「第6」はロッシーニのパロディのような痛快作）、また、少年時代の弦楽のための11曲のシンフォニアを後世ナンバリングされた5曲（これは順番が滅茶苦茶、しかも作曲者当人は最終作「第3」しか交響曲として公認していない）に加えるべきか悩ましいフェリックス・メンデルスゾーン（1809〜47）はともかく、ほかに6曲以上書いているシンフォニストの作品を概観すると……。

アントン・ブルックナー（1824〜96）の「第6」は、モニュメンタルな前期の集大成「第5」と、後期様式の始まりを告げる「第7」の間に咲く、谷間の百合のような佳作（ブルックナーお決まりの改訂もない）。アントニン・ドヴォルザーク（1841〜1904）の「第6」は、実は最初に出版された作品で、かつては「第1」と呼ばれていた。古典性と民俗性が調和した、交響曲作家としてのドヴォルザークの新たな出発点だ。グスタフ・マーラー（1860〜1911）の「第6」は4楽章構成と一見古典的だが、構造が破綻する寸前まで内容が複雑化し、打楽器等の用法も異常、潜在的な物語性も併走する。「第5」で純粋器楽の交響曲に回帰した後の、さらに大胆な実験作。彼自身のその後の「悲劇的」な生を期せずして予言してしまったという側面もある。

ジャン・シベリウス（1865〜1957）の「第6」は、祝典的で大成功を収めた「第5」とは対照的、教会旋法も導入した透明で超自然的な気配すら漂う孤高の作品。ドミトリー・ショスタコーヴィチ（1906〜75）の「第6」は、これも公的大成功を収めた「第5」の反動のように陰鬱でシニカルな作品。緩徐楽章から徐々に加速してゆく3楽章構成も独得。興味深いことに、同じ旧ソ連のセルゲイ・プロコフィエフ（1891〜1953）の「第5」と「第6」の関係にも似た図式が見られる。

最後の交響曲に隠れたドラマ

「第6」が最後になってしまった作曲家についてはどうか。ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840〜93）の〈悲愴〉、終楽章が深いペシミズムの中、消え入るように終わってしまう異色の交響曲。カール・ニールセン（1865〜1931）の「第6」は〈素朴な交響曲〉という副題とは裏腹に、複雑で難解かつ辛辣なユーモアに満ちた、一筋縄ではいかない作品。

ボフスラフ・マルティヌー（1890〜1959）の「第6」は1953年の完成。それまでの5曲がすべてナチスを避けてのアメリカ亡命時代に完成されたのに対し、これはヨーロッパに帰って書きあげた作品。〈交響的幻想曲〉と名づけられ、ドヴォルザークの〈レクイエム〉からキリエ（主よあわれみたまえ）の主題が引用されたり、自作の引用があったり、波乱多き人生の回顧や、故郷チェコへの望郷の念に満ちた感動的な作品だ。

仮定的な結論。「第6」には、人生の岐路のドラマが隠れている？

（やざわ たかき／音楽評論）

亀山郁夫 ——③

Ikuo Kameyama

悲劇の主人公に自ら重ね

ブラームス：交響曲 第4番

私のクラシック音楽の原体験は小学4年の夏、ラジオでフルトヴェングラー指揮、バイロイト祝祭管によるベートーヴェンの〈第九〉（1951年のライヴ録音）を家族と一緒に聴いた時に始まります。この世のものとは思われない、あの幽玄な響きは子供心に強烈な衝撃を与えました。中学生になると「クラシック音楽ノート」を自分で作り、聴いた曲の感想を1曲1ページずつ書き記すようになりました。

そして中学1年の終わりに、お小遣いをはたいて「コンサートホール・ソサエティ」というクラシックレコードの通信販売の会員になり、私のもとに定期的に30センチLPレコードが送られてくるようになった。その2枚目がカール・シューリヒト指揮、バイエルン放送響のブラームス交響曲第4番と〈悲劇的序曲〉。まさに運命の出会いでした。〈第4番〉は10代の私の世界観を決定づけた音楽になったのです。

実はその前に伏線がありました。中学2年だった私は、英語の副教材でチャールズ・ラムの『Tales from Shakespeare（邦題・シェイクスピア物語）』を読んでいました。シェイクスピアの主要作品のあらすじをかいつまんで紹介した本の中で、あの名作「ハムレット」に出会い、主人公の王子に心酔してしまい、同時にもう一人の悲劇の主人公、オフェーリアに恋してしまったのです。

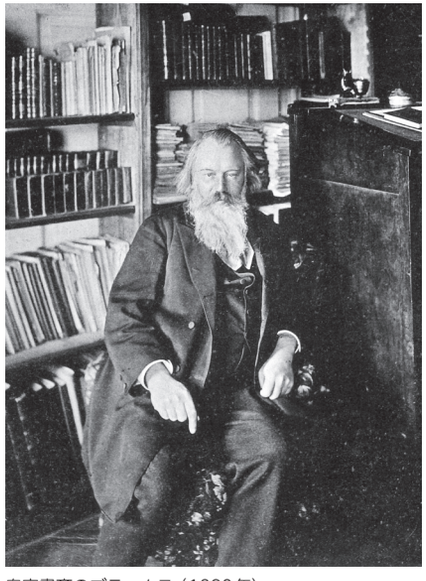
その頃、私は家庭の事情から暗く鬱屈（うっくつ）した日常生活を送っていました。ハムレットは殺された父の復讐（ふくしゅう）を誓い、恋人のオフェーリアや王妃である母を失い、最後に思いを遂げて死んでいく。悲劇の英雄に自らを重ねたのは、ロマンチックな自己逃避だったと思います。そんなハムレットへの憧れが、初めて聴いた〈第4番〉と一種の化学反応を起こし、ブラームスの音楽をシェイクスピアの悲劇になぞらえて聴くようになりました。

第4楽章の壮大なパッサカリアは、当時の私にとって悲劇の集大成でした。冒頭の主題提示部は運命を告げるファンファーレ。最初、枯淡の境地を思わせた音楽はどんどん力を増してゆき、大きな盛り上がりを見せた後で一転、可憐（かれん）なフルート・ソロが出てくる。私はフルートを吹きたくて吹奏楽部に入ったのですが、その思いはかなわなかった。だからフルートは初恋の楽器であり、ここにオフェーリアへの憧れを重ねたのです。

そして最初の主題が再現して逃れられない運命が示され、展開部に突入します。ここは「ハムレット」でいえば、第3幕の王子のセリフ「To be, or not to be, that is the question（生きるべきか死ぬべきか、それが問題だ）」に当たる箇所。音楽は悲劇の色彩を濃くし、再現部に入るといよいよ破滅の予感が迫ってくる。運命はもう止められない——。

おかしな空想だと思われるかもしれません。でも、私にとって音楽を聴く楽しみは、多くの場合、いわば文学による物語体験を反映したものです。音楽のメロディーやハーモニーから具体的な人間のドラマをイメージしてしまう。一種の幻視みたいなものでしょうか。

〈第4番〉は長い間、シューリヒトの演奏によってのみ記憶されていました。ところが最近になって、フルトヴェングラーが1948年にベルリン・フィルを率いてロンドン公演を行った時の〈第4番〉のリハーサル映像をYouTubeで見ました。



自宅書斎のブラームス（1890年）

映像は第4楽章の途中から始まりますが、主題再現部に入ると猛然とアッチェレランドする。まるで音楽のデーモン（悪魔）が乗り移ったかのような壮絶な指揮。これはもう、ブラームスの音楽を超えた巨大なイリュージョンです。運命に抗（あらが）い、なお生きようとする音楽の根源的な力がここにはある。魂を揺さぶられる熱い演奏に、思わず我を忘れて聴き入ってしまいました。67歳になってなお、この曲に感動できる自分自身に驚きながら。（聞き手・事務局）

profile かめやま・いくお

1949年栃木県生まれ。名古屋外国語大学長。音楽、美術を含むロシア文化・文学研究の第一人者。翻訳したドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』はベストセラーに。2013年『謎解き「悪霊」』で読売文学賞受賞。著書・訳書多数。

◎ヴァイオリン奏者

田村博文

Hirofumi Tamura

演奏技術、アンサンブルとも段違いの楽団に成長しましたよ

≪読売日本交響楽団の定年は60歳。田村さんは来月でその節目を迎える。武蔵野音大を卒業した年に入団して37年間、読響の弦を支えた≫

最初に読響でエキストラ（賛助出演）として演奏したのは、大学3年の頃ですからもう長いですね。当時のオーディションは一度、全楽員の前で弾いて過半数の票をとれば合格でした。楽員は男だけ。1990年頃から上手な女性がどんどん入るようになりました。定年は迎えますが、まだサヨナラではなくて、9月からは「エルダー楽員」として弾かせてもらいます。

≪数多くのカリスマ指揮者と出会ったのが財産ですね。思い出深いのは≫

何と言ってもロリン・マゼール。読響創立25周年の1987年にマーラーの交響曲第2番〈復活〉、2回目は92年でホルストの〈惑星〉などでした。天才肌で、リハーサルに全く無駄がない。オーケストラの色彩をタクトでガラリと変えることができました。我々も相当気合が入って熱い演奏でしたよ。

名誉指揮者クルト・ザンデルリンクが振ったブラームスの交響曲第1番も心に沁（し）みる名演奏でしたね。コンサートマスターの岡山潔さんが「もう一生この曲を弾かなくていいぐらい満足した」と語っていました。あんな巨匠とステージ上でやりとりできたことが、私たち演奏家にとって一番の幸せです。

フリューベック・デ・ブルゴスと言えば、81年の欧州公演（当時常任指揮者）。彼をはじめ、三石精一、小林研一郎、ピアノの内田光子、ヴァイオリンの藤川真弓らとスペイン、東西ドイツ、オーストリア、英国など8か国で28回公演し、約6週間にわたる大演奏旅行でした。最後のライプツィヒでは、カラヤン指揮ベルリン・フィルの演奏会（R.シュトラウスの〈アルプス交響曲〉）に全員招かれ、こんなに凄いのか、と度肝を抜かれましたね。その夜、ベルリン・フィルとゲヴァントハウス管との交歓パーティにも出席したのですが、当時は冷戦下でね、ドイツの東西分裂後初めてという音楽家兄弟の涙の再会もよく覚えています。

≪ソリストとの協演も、オーケストラの醍醐味です≫

5月もフルートのパユ、ヴァイオリンのムローヴァと共演したばかりですね。器楽だけでなくホセ・カレーラスやビルギット・ニルソンなど歌手も含めて世界の超一流の音を間近で聴き、何度もぞくぞくしました。印象深いのはヴァイオリニストのイヴリー・ギトリス。パガニーニの再来と言われてね。自由なんですよ、歌い方が。テンポにとらわれないで。音がポーンと飛んでいく感じがね。ああ、こうやって楽器を扱うのかと。ギトリスは本番前、自分の控室を出て歩き回りながらヴァイオリンを弾くのですが、その日弾く曲ではないのです。我々が楽屋で将棋とか指していると後ろからいい音が聴こえるので、だれだと見るとギトリスなんです（笑）。アンコールも自由でね。毎回やるが、曲は決めない。日本の歌を入れたりして。即興で演奏会ごとに違いました。あんな人いないです。

≪37年で読響の音もずいぶんと変わったのでしょうね≫

技術は確実に上がりました。今や読響のオーディションには内外から大勢、しかもソリストまで受けに来る。こんなにレベルが高く、公平なオーディションはないと思いますよ。アンサンブル能力もかつてと段違い。メシアンやデュティユーなど現代曲も多いのに、練習初日でほぼ出来上がっています。昔は最後まで出来ない箇所がありました。練習中に「昔はここ合わなかったよなぁ」と思い出すんです（笑）。

≪読響には「田村観光」という言葉があります≫

入団当時、演奏旅行が多かった。2か月に一度、2週間ぐらいあったことも。旅館を予約し、宴会場を探すのが最若手の僕の仕事だった。以来、ずっとそんな役割です。今は、事務局が宿泊先を確保するから、もっぱら飲み会や空き時間のアレンジですが……。

読響は、演奏会が終わると、楽員同士でよく飲みに行きます。仲が良くて雰囲気がいいのも読響の伝統かなぁ。最高の音楽をするには美味しいお酒を飲まなきゃ（笑）。いい仲間に囲まれて充実した仕事をしています。お客様にもますます音楽を楽しんでいただけると思います。

フランクフルト歌劇場音楽総監督のヴァイグレが読響初登場！

8/17（水）19:00　第595回 名曲シリーズ　サントリーホール

メンデルスゾーン：序曲〈ルイ・ブラス〉
シューマン：交響曲 第4番
ドヴォルザーク：交響曲 第8番
指揮：**セバスティアン・ヴァイグレ**

セバスティアン・ヴァイグレ

オペラを得意とする名匠が振るR.シュトラウス・プログラム

8/23（火）19:00　第561回 定期演奏会　サントリーホール

R.シュトラウス：交響詩〈ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら〉
R.シュトラウス：4つの最後の歌
R.シュトラウス：家庭交響曲
指揮：**セバスティアン・ヴァイグレ**
ソプラノ：**エルザ・ファン・デン・ヘーヴァー**

セバスティアン・ヴァイグレ

エルザ・ファン・デン・ヘーヴァー

ウィーン・フィル首席のD.オッテンザマーが妙技を披露

8/27（土）14:00　第190回 土曜マチネーシリーズ　東京芸術劇場コンサートホール

8/28（日）14:00　第190回 日曜マチネーシリーズ　東京芸術劇場コンサートホール

ウェーバー：歌劇〈魔弾の射手〉序曲
モーツァルト：クラリネット協奏曲
ブラームス：交響曲 第1番
指揮：**セバスティアン・ヴァイグレ**
クラリネット：**ダニエル・オッテンザマー**

セバスティアン・ヴァイグレ

ダニエル・オッテンザマー

8月 公演の聴きどころ

8月は、フランクフルト歌劇場の音楽総監督を務めるドイツの本格派指揮者、**セバスティアン・ヴァイグレ**が読響に初登場する。17日の《名曲シリーズ》では、ファンタジー濃厚なシューマンの交響曲第4番と、親しみやすい民俗性に富んだドヴォルザークの交響曲第8番を披露する。シューマンが妻クララへ誕生日プレゼントとして作曲したロマンあふれる佳品と、ボヘミア的な、のどかで明るい田園風景を思わせる名旋律に満ちたドヴォルザークの人気曲で、表情豊かな読響サウンドを楽しんでもらいたい。

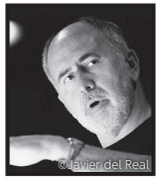
23日の《定期》では、ヴァイグレが得意なリヒャルト・シュトラウス・プログラム。ベルリン国立歌劇場管のホルン奏者から指揮者に転身した経歴を持つヴァイグレだけに、ホルンが活躍する交響詩〈ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら〉などを、どうさばくのか楽しみだ。後半は、シュトラウス自身の家庭の日常を音楽でユーモラスに描写したとされる〈家庭交響曲〉を取り上げる。夫（シュトラウス本人）、妻、子供それぞれの主題が絡み合い賑やかな家庭の様子が描かれる本作は、ヴァイグレ指揮のCD録音も好評だけに、絢爛（けんらん）豪華な響きを堪能できるだろう。また、〈4つの最後の歌〉では、バイエルン国立歌劇場などで活躍する歌姫**エルザ・ファン・デン・ヘーヴァー**の歌声にも注目したい。

27日・28日の《マチネーシリーズ》では、バイロイト音楽祭などでも活躍するヴァイグレらしく、ドイツ・オーストリアの名品をそろえた。ブラームスの交響曲第1番は、最初の構想からおよそ20年を経て、ブラームスが43歳の時に完成させた苦心作。ロマン派屈指の人気交響曲を、本場のたたき上げらしい腰の据わった重厚なサウンドで聴かせてくれるだろう。モーツァルトのクラリネット協奏曲では、ウィーン・フィルの若き首席クラリネット奏者、**ダニエル・オッテンザマー**が共演。明るさの中に憂愁の影が漂うモーツァルト最晩年の傑作を、艶（つや）やかな美音で聴かせてくれそうだ。（文責：事務局）

読響チケットWEB　検索

二人の巨匠が魅せる《極上のスペイン音楽》

9/16（金）19:00　第596回 名曲シリーズ　サントリーホール



ヘスス・ロペス=コボス

シャブリエ：狂詩曲〈スペイン〉
ファリャ：交響的印象〈スペインの庭の夜〉
アルベニス：〈イベリア〉から
トゥリーナ：交響詩〈幻想舞曲集〉

指揮：ヘスス・ロペス=コボス　ピアノ：**ホアキン・アチュカロ**

コンサートマスター長原幸太らが繰り広げる白熱の室内楽

9/20（火）19:30　第11回 読響アンサンブル・シリーズ　よみうり大手町ホール ※19:00から解説　**完売**

長原幸太

《長原幸太ら読響メンバーの室内楽》
モーツァルト：ディヴェルティメント 変ホ長調 K.563
ベートーヴェン：交響曲 第7番（弦楽五重奏版）

ヴァイオリン：**長原幸太**（コンサートマスター）、**瀧村依里**（首席）
ヴィオラ：**鈴木康浩**（ソロ・ヴィオラ）、**柳瀬省太**（ソロ・ヴィオラ）
チェロ：**髙木慶太**（首席代行）

ロジェストヴェンスキーが十八番の傑作バレエを指揮

9/24（土）14:00　第191回 土曜マチネーシリーズ　東京芸術劇場コンサートホール

9/25（日）14:00　第191回 日曜マチネーシリーズ　東京芸術劇場コンサートホール

ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー

《チャイコフスキー／三大バレエ名曲選》
チャイコフスキー：〈白鳥の湖〉、〈眠りの森の美女〉、〈くるみ割り人形〉から

指揮：ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー（名誉指揮者）

ロシアの重鎮がショスタコーヴィチ作品で渾身のタクト！

9/26（月）19:00　第562回 定期演奏会　サントリーホール

ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー

ショスタコーヴィチ：バレエ組曲〈黄金時代〉、ピアノ協奏曲 第1番、交響曲 第10番

指揮：ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー（名誉指揮者）
ピアノ：**ヴィクトリア・ポストニコワ**

お申し込み・お問い合わせ　**読響チケットセンター**（10:00～18:00／年中無休）　0570-00-4390（ヨミキョー）
ホームページ・アドレス　http://yomikyo.or.jp/

華麗に響く〈幻想交響曲〉。多摩公演だけの特別プログラム！

10/ 2（日）15:00　第3回 パルテノン名曲シリーズ　パルテノン多摩大ホール

シルヴァン・カンブルラン

ベルリオーズ：序曲〈ローマの謝肉祭〉
ビゼー：〈アルルの女〉第2組曲
ベルリオーズ：幻想交響曲

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

カンブルランが振る〈グレイト〉。ドイツの鬼才が共演！

10/ 8（土）14:00　第192回 土曜マチネーシリーズ　東京芸術劇場コンサートホール

10/ 9（日）14:00　第192回 日曜マチネーシリーズ　東京芸術劇場コンサートホール

10/10（月・祝）14:00　第91回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ　横浜みなとみらいホール

シルヴァン・カンブルラン

マルティン・シュタットフェルト

ラモー：〈カストールとポリュックス〉組曲
モーツァルト：ピアノ協奏曲 第15番
シューベルト：交響曲 第8番〈グレイト〉

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）
ピアノ：**マルティン・シュタットフェルト**

気品に満ちた美の世界！ 名匠が指揮する《珠玉の名曲選》

10/14（金）19:00　第597回 名曲シリーズ　サントリーホール

カレン・カーギル

シューベルト：劇音楽〈ロザムンデ〉序曲　ベルリオーズ：夏の夜
シューベルト：劇音楽〈ロザムンデ〉から"間奏曲 第1番"、"間奏曲 第2番"
ベートーヴェン：交響曲 第8番

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）
メゾ・ソプラノ：**カレン・カーギル**

世界的ヴァイオリニスト Midori が二つの協奏曲を一挙披露

10/19（水）19:00　第563回 定期演奏会　サントリーホール

五嶋みどり

シューベルト（ウェーベルン編）：6つのドイツ舞曲
コルンゴルト：ヴァイオリン協奏曲
J. M. シュタウト：ヴァイオリン協奏曲〈オスカー〉（日本初演）
デュティユー：交響曲第2番〈ル・ドゥーブル〉

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）
ヴァイオリン：**五嶋みどり**